

リチウムイオン電池に関する 議会報告会(意見交換会)報告書

2026年6月6日 渋川福祉センターにて

尾張旭市議会 都市環境委員会

はじめに

近年、リチウムイオン電池はスマートフォンやモバイルバッテリーだけでなく、電動工具、掃除機、空調服、玩具、小型家電、電動モビリティなど、私たちの日常生活のあらゆる場面で利用されるようになってきている。その一方で、ごみ収集車やごみ処理施設における発火・火災事故が全国各地で発生し、自治体における安全対策や市民への周知・啓発が重要な課題となっている。

本意見交換会では、市民が日頃感じている疑問や不安、実際に生活の中で困っていること、さらには行政や事業者に期待する取組について率直な意見交換が行われた。

市民の参加者は29人であった。

本報告書は、A・B・C 各グループで出された意見を可能な限り市民の言葉を尊重しながら整理するとともに、共通する課題や改善の方向性を明らかにし、今後の施策検討の参考資料として取りまとめたものである。

1 意見交換会から見てきた全体像

今回の意見交換会を通じて最も多く聞かれた声は、「回収場所がない」ということ以上に、

- ・ 何がリチウムイオン電池なのか分からない
- ・ どのように分別すればよいのか分からない
- ・ どこへ持って行けばよいのか分からない
- ・ 身近に相談できる場所がない

という「分からない」という不安であった。

また、高齢者だけでなく、若い世代でも製品内部にリチウムイオン電池が組み込まれていることを知らないケースが多く、認知不足が事故防止の大きな課題であることが浮き彫りとなった。

さらに、市民からは回収方法だけでなく、

- ・ 学校教育
- ・ SNS や動画による情報発信
- ・ 家電量販店との連携
- ・ コンビニ等での回収
- ・ メーカー責任
- ・ デポジット制度
- ・ 持ち込み困難者への配慮

など、多様な視点から具体的な提案が数多く寄せられた。

2 報告書の目的

本報告書は、市民一人ひとりの率直な声を共有し、

1. 現状の課題を整理すること
2. 市民目線で必要とされる施策を明らかにすること
3. 行政・市民・事業者が連携して火災事故防止に取り組む方向性を示すこと

を目的としている。

3 市民の生の声(テーマ別整理)

(1)「何がリチウムイオン電池なのか分からない」という声

今回の意見交換会で最も多く聞かれたのは、「リチウムイオン電池そのものが分からない」という率直な意見であった。

「年齢的にそんなにリチウムイオン電池を使っている認識はない。」

「リチウムイオン電池と言われても、どれがそうなのか分からない。」

「充電できるもののほとんどがリチウムイオン電池だと、もっと知ってもらわないといけない。」

また、近年は製品の内部に電池が組み込まれているものが増え、自分で取り外すことができない製品も多いことから、

「安全のため取り外せないようになっている製品もある。」

という意見も出された。

さらに、昔はコンセントを使っていた製品が次々と充電式へ移行していることから、

「知らないうちに身の回りが充電式製品だらけになっている。」

という趣旨の意見もあった。

(2)「どう捨てればよいか分からない」という声

認知不足と並んで多かったのが、処分方法への不安である。参加者からは、

「どれを捨てたらいいのか分からない。」

「捨て方そのものが分かりづらい。」

「どこへ持っていけばいいのか迷う。」

など、実際の排出時に困っている現状が率直に語られた。

また、発火防止のための絶縁テープなどについても、

「テープを貼れば本当に大丈夫なのか。」

「最終的には誰かがチェックしているのか。」

という素朴な疑問も出されており、市民が安心して排出できる情報提供の必要性が感じられた。

(3)「回収場所・持ち込み方法」に関する声

回収場所についても多くの意見が出された。

「リサイクルひろば『クルクル』と言われても、持って行けない人のことを前提に考えてほしい。」

「高齢者や車のない人にとっては簡単ではない。」

「もっと身近な場所で回収してほしい。」

また、

「家電量販店にも協力してもらえないか。」

「身近な店舗(例えばコンビニ)でも回収できれば利用しやすい。」

という提案もあった。

単純に回収拠点を増やすだけでなく、利用しやすさやアクセス性まで考慮した制度設計を望む声があった。

(4) 啓発・教育に関する声

市民からは、単なるチラシ配布だけではなく、多様な情報発信の必要性も指摘された。

「まずは意識改革が必要ではないか。」

「人ごとではなく、自分事として考えることが大切。」

また、

「危険性を知れば行動は変わる。」

「今回参加して初めて危険性がよく分かった。」

「家にある昔の携帯電話も処分しようと思った。」

という声もあり、啓発活動そのものが行動変容につながる可能性が示された。さらに、

「使う人だけではなく、実際にゴミを出す担当者への周知も重要。」

という家庭内の役割分担に着目した意見も出されている。

(5) 今後さらに増加するリスクへの懸念

参加者からは、社会全体の変化を踏まえた意見も数多く寄せられた。

「電動モビリティはこれからますます増える。」

「充電式のおもちゃも非常に増えている。」

「安価な海外製品も多くなっている。」

さらに、

「技術が進歩して容量が大きくなるほど発火時の危険性も高くなるのではないか。」

「法整備が追いついていない海外製品への不安もある。」

という意見もあった。

また、空調服などの季節用品についても、

「長期間しまっている間にバッテリーが膨張する危険がある。」

「昔の乾電池の液漏れとは違う新しい危険性として考える必要がある。」

との指摘があった。

これらの意見から、市民は現在だけでなく将来的なリスクについても強い関心を持っていることがうかがえた。

4 意見交換から見えてきた主な課題

(1)最大の課題は「認知不足」である

今回、最も大きな課題として浮かび上がったのは、市民の認知不足である。

参加者からは、

- ・「何がリチウムイオン電池なのか分からない」
- ・「自分はあまり使っていないと思っていた」
- ・「充電するもののほとんどがリチウムイオン電池とは知らなかった」

といった率直な意見が数多く聞かれた。

これは知識不足というよりも、社会全体の製品構造の変化に情報提供が追いついていない現状を示している。現在ではスマートフォンだけでなく、イヤホン、玩具、掃除機、電動工具、モバイルバッテリー、空調服、小型家電など、身近な製品の多くにリチウムイオン電池が使用されている。

「知っている人だけが正しく分別できる」という制度ではなく、「知らない人でも迷わない仕組み」が必要である。

(2)回収体制だけでは事故は防げない

回収場所を増やすことは重要であるが、それだけでは十分ではない。

市民の声からは、

- ・ どこへ持っていけばよいか分からない
- ・ 持って行くことが難しい人もいる
- ・ 近くに相談できる場所がない

という課題が見えてきた。特に高齢者や車を利用しない人にとっては、「回収拠点が存在すること」と「利用できること」は必ずしも一致しない。

そのため、

- ・ 身近な回収場所の整備
- ・ 民間事業者との連携
- ・ 相談窓口の充実
- ・ 持ち込み困難者への配慮

など、多面的な対策が必要と考えられる。

(3)啓発は「知識提供」ではなく「行動変容」を目指すべき

今回の意見交換会では、

「危険性を知ったので家にある古い携帯電話を処分しようと思った。」

という発言があった。

これは、適切な啓発によって市民の行動が変化することを示している。

単なる注意喚起だけでなく、

- なぜ危険なのか
- 火災が実際に起きていること
- 何をすればよいのか

を分かりやすく伝えることが重要である。

また、情報発信の対象も、

- 製品を使用する人
- 家庭でごみを分別する人
- 高齢者
- 子ども
- 保護者

など、多様な対象を意識した取組が求められる。

(4) 今後は「普及拡大」を前提とした対策が必要

リチウムイオン電池は今後さらに普及することが予想される。

参加者からも、

- 電動モビリティ
- 充電式玩具
- 小型家電
- 海外製品
- 大容量バッテリー

などへの言及が多くあった。

つまり、現状への対応だけではなく、「これからさらに増える」という前提で制度設計を行う必要がある。製品数が増えれば、ごみとして排出される量も増え、火災リスクも高まる可能性がある。

将来を見据えた継続的な対策が不可欠である。

5 市民から寄せられた改善提案

今回の意見交換会では、多くの具体的な提案も寄せられた。

情報発信・啓発

- ・ 「充電するもの＝リチウムイオン電池」という分かりやすい周知
- ・ SNS・YouTube など動画媒体の積極活用
- ・ 広報誌やチラシの充実
- ・ 市ホームページの分かりやすい情報発信
- ・ 実際の火災事例の紹介
- ・ 写真を多用した分別案内

教育

- ・ 学校教育への導入
- ・ 子どもへの環境教育
- ・ 保護者も含めた学習機会
- ・ 地域や自治会での勉強会

回収体制

- ・ 家電量販店との連携
- ・ 民間事業者との協力
- ・ より身近な回収場所の整備
- ・ 持ち込み困難者への配慮
- ・ 相談しやすい窓口の充実

制度・仕組み

- ・ デポジット制度の検討
- ・ インセンティブ制度の導入
- ・ メーカー責任の強化
- ・ 海外製品への安全対策
- ・ 発火防止対策のさらなる充実

今回の意見交換会では、市民から単なる要望だけではなく、「自分たちも学び、行動しなければならない」という前向きな意見も多く聞かれたことは、大変意義深い成果であった。

第12回 尾張旭市議会報告会・意見交換会 次 第

日 時 令和8年6月6日（土）

午前10時から11時

場 所 渋川福祉センター 3F 研修室

テーマ：リチウムイオン電池、どう捨てていますか？

スケジュール（司会進行：大島もえ）

	時 間	内 容	担 当
1	10:00～10:02 （2分）	開会のあいさつ	尾張旭市議会 議長 さかえ 章 演
2	10:02～10:20 （18分）	議会報告会	① 経緯説明 尾張旭市議会 都市環境委員会 委員長 いとう 伸一 ② 内容説明： 尾張旭市議会 都市環境委員会 副委員長 丸山 幸子
3	10:20～10:50 （30分）	意見交換会 （グループ単位）	
4	10:50～10:54 （4分）	グループ単位発表	各グループ尾張旭市議会都市環境委員
5	10:54～10:55 （1分）	閉会のあいさつ	尾張旭市議会 都市環境委員会 委員長 いとう 伸一
6	10:55～11:00 （5分）	アンケートの記入	

令和8年尾張旭市議会都市環境委員（公式HP記載順）

いとう伸一、丸山幸子、大島もえ、谷口武司、松原たかし、山下幹雄